

修士論文（要旨）
2019年1月

対面式タンドム学習がもたらす教室内学習への影響
—国際化を目指す大学における活動実践報告から—

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
217J3001
久米 ひかり

Master's Thesis(Abstract)

January 2019

Influence on Classroom Study by face-to-face Tandem Learning:
From Practical Report of Activities at University aiming for Internationalization

Hikari Kume

217J3001

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第1章：はじめに	1
1.1 研究背景	1
1.2 研究目的	2
第2章 先行研究	4
2.1 タンDEM学習の定義	6
2.2 コミュニケーション・ストラテジーの定義	7
第3章 調査概要	9
3.1 調査方法	9
3.2 参加者	10
3.3 活動内容と手順	11
第4章 データの分析	13
第5章 コミュニケーション・ストラテジーの使用実態	14
5.1 コミュニケーション・ストラテジーの機能と役割	14
5.2 コミュニケーション・ストラテジーが及ぼす影響	17
第6章 タスク使用による効果	20
6.1 「お助けタスク」がもたらす自律性	20
6.2 Instagram の有用性	20
6.3 食べログを使用した社会参加	22
第7章 自由参加によるタンDEM学習の役割	27
7.1 参加者の振り返り	27
7.2 E タンDEM	27
7.3 パートナーの役割	28
7.4 タンDEM学習の役割	29
第8章 総合的考察	32
第9章 まとめと今後の課題	38

参考文献

巻末資料

今日の世界は、技術革新や規制緩和により、ヒト・モノ・カネ・情報が流動的に変化している。このような変化は教育理念にも広がり、宮副（2009）は、教師は教えるという役割だけでなく、「学習者の自律学習の支援者、学習環境の設計者としての役割」も期待されてきていることや、学習者においても「自らの学習を管理できる自律的な学習者」となることが求められていると述べている。こうした教育観・学習観の変化により、日本の大学機関ではグローバル人材の育成を目指し、国際化戦略に基づいた積極的な取り組みが活発化している。

稿者が調査を行った首都圏の A 大学では、現在約 700 人の留学生を受け入れ、海外に派遣する学生数も多いため様々な国際交流の場が提供されている。しかしながら、日本人学生と留学生が共に受講できる授業は数少なく、交流の場においても学習に発展するケースはほとんどないようである。約 700 人も留学生を受け入れているにもかかわらず、日本人学生との言語交流活動が活発に行われていないのは、大きな問題でもあり、絶好の機会を使用していないのは残念なことでもある。これまでの実践報告において高い満足度が報告されている「タンデム学習」を、言語交流活動として援用すれば、異なる言語文化背景の学生たちが対等に楽しく相互交流できる学習環境が提供できるのではないだろうか。ひいては、大学全体がより魅力的な多言語交流に基づく学びの場となる可能性も広がるのではないだろうか。

そこで、本研究では、日本語母語話者である日本人学生 3 名と英語母語話者である留学生 3 名を調査対象者とし、タンデム学習における活動実践を行った。タンデム学習とは、母語や母文化の異なる人同士がペアになり、言語や文化を個別的に学ぶ学習法である。互いに役割を交替することで可能となる互惠性と、目の前の問題や課題を解決するために自律的に行動を起こす学習者オートノミーが基盤となっている（脇坂，2013）。研究課題は 1) 参加者は、セッション中にどのようなコミュニケーション・ストラテジー（以下、CS）を使用して活動に参加したのか、2) タスク（課題）達成を活動の到達目標とすることで、参加者の学びにどのような効果をもたらされるのか、3) 自由参加によるタンデム学習は参加者の学びにとってどのような役割を果たしていたのか、の三点である。これらを追究することで、タンデム学習が今後どのような学習者に有効であり、どのようなタスクが効果的であるのかということが提案できると考えた。

上記の課題究明のために、＜教室内学習＞＜教室外学習＞＜ストラテジー＞＜タンデム学習の課題＞の 4 つの学術分野を特定し、主要先行文献を概観し、考察を行った。＜教室内学習＞と＜教室外学習＞を繋いだ試みとして、小島（2008）、三宅（2007）、張（2016）があげられ、「個別性に富んだ学習」「教師の役割」「学びながら使用できる環境」が重要なキーワードとなった。＜ストラテジー＞の分野からは、学習ストラテジー（以下、学習 St）と CS は重要な関係性があることに気づき、着眼点とした。これまでの CS の研究は、話し手の CS に焦点を当てられてきていたが、本研究では聞き手の CS について、新たに発見された役割や機能に着目し、分析した。＜タンデム学習の課題＞は、これまでのタンデム学習実践研究から報告されたものを、小林（2016）が四点にまとめており、本研究ではそれらの課題を解決するようにデザインした。

本論文では、研究課題から以下のことが明らかになった。

1) 参加者は自身の母語が使われるセッションで期待される主導権と隠れた主導権を持つ

ことが分かった。L2 話者は L1 が使用する以下のような CS を期待してセッションを行っていた。①話題を振る、②スキヤフォールディング、③言語レベルの調節、④待つ、⑤画像などの視覚的情報、の 5 つの CS を使い、双方向のコミュニケーションを成立させていた。期待される主導権が L1 によって行使されない場合には、隠れた主導権として以上の 5 つは使われずにセッションが進行されていた。

- 2) 活動中に新たな言語知識を増やすだけでなく、L2 使用者としてタスクを通じた社会参加を行っていたことが分かった。
- 3) タンデム学習では、開始前の能力に加えて得意分野や苦手分野、伸ばしたい分野を聞くことで、参加後の内省にも役立つことが分かった。

今後の課題は、教室内学習との連携を行う上で、タンデム学習はどのようなデザインをしていく必要があるのか、また参加者に CS をどのように認識してもらうのかを解明することである。

参考文献

- 青木直子 (2016) 「タンデム学習—FAQと経験知からの問題—」『ことばと文字』6, 98-106.
くろしお出版
- 大河内朋子 (2011) 「タンデムプロジェクトの実践報告—コース設計とその成果—」『大学教育研究 三重大学授業研究交流誌』19, 1-6.
- オックスフォード, レベッカ, L. 著/宍戸通庸、伴紀子訳 (1994) 『言語学習ストラテジー：外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社.
- 小島祐子 (2008) 「教室内と教室外活動を繋げる試み—個人プロジェクトを通して—」『桜美林言語教育論叢』4, 141-148.
- 小林浩明 (2016) 「タンデム学習の意義と可能性」『北九州私立大学国際論集』14, 135-145.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 張彤 (2016) 「教室内の学習から教室外のコミュニケーション活動へ—中国語母語話者との交流を通して—」『Lingua』27, 171-180.
- 仁科陽江 (2010) 「タンデム学習の実態と対策—成功する自律相互学習のために—」『日本語教育連絡会議論文集』23, 80-90.
- 浜田麻里 「学習者はどのようなストラテジーを使っているか」宮崎里司・J.V.ネウストプニー (1999) 『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論にむけて—』くろしお出版.
- 方穎琳 (2010) 「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に—」『言語文化と日本語教育』39, 122-131.
- 三宅若菜 (2007) 「教師はどのようにリソースを捉えているのか—自律的な学習を目指した日本語学習の場合—」『桜美林言語教育論叢』3, 51-62.
- 宮副ウォン裕子 (2009) 「広義の言語教育評価を考える」『言語教育評価研究』1, 66-72.
- 脇坂真彩子 (2012) 「対面式タンデム学習の互惠性が学習者オートノミーを高めるプロセス—日本語学習者と英語学習者のケース・スタディー—」『阪大日本語研究』24, 75-102.
- 脇坂真彩子 (2013) 「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」『阪大日本語研究』25, 105-135.
- Little, D., & Brammerts, H. (Eds.). (1996). *A Guide to language learning in tandem via the internet*. CLCS occasional paper no. 46, Dublin: Trinity College, Center for Language and Communication Studies.